

第5章 学校信頼と保護者ネットワーク： 小学校1年生の保護者へのインタビュー調査から

竹森香以（フェリス女学院中学校・高等学校）

1. 変容する家族と保護者ネットワーク

保護者相互のつながりは、保護者の学校への信頼に影響を及ぼしていると言われる（露口 2012）。「『信頼される学校づくり』のためには、保護者相互をつなぎ、保護者と地域をつなぐことが重要」（露口 2012: 67）であると指摘されている。

一方で、保護者の側に目を向けてみると、共働き・ひとり親家庭の増加や、ライフスタイルの多様化等、保護者を取り巻く環境は近年大きく変容している。とりわけ、小学校1年生の子供を持つ働く保護者については、「小1の壁」と呼ばれる問題が社会問題化している。これには、保育所と比較した場合の学童保育の保育時間の短さや質保証の不十分さを表す「質的な壁」と、学童保育の供給量不足を表す「量的な壁」がある（天野 2009）。また、平日昼間に行われることの多い学校行事や PTA 活動との兼ね合いから、子どもが就学する時期に働き方の変更や退職を考える母親が多いと言われることも指摘されている（労働政策研究・研修機構 2013）。

子どもが小学校に入学することが、保護者にとっても大きな生活の変化とギャップをもたらし、学校や他の保護者とのつながりを持つ上で影響を及ぼしていることが推測できる。これまで、日本の研究においては保護者ネットワークの質的な内実については十分に明らかにされて来なかったが、こうした社会背景や実生活の変化を考慮しながら、小学校の保護者ネットワークの実状を明らかにすることは、保護者ネットワークに関する議論を実効性を持ったものとする上で有益であると考えられる。

そこで、本章では、「小学校の保護者ネットワークは、質的にどのような特徴を持っているのか」を、小学校1年生（2年生含む）の保護者 25 名へのインタビュー調査を通じて明らかにする。

2. これまでの先行研究

保護者ネットワークは学校信頼に影響を与えるとされるが、信頼の効用については多くの研究の蓄積がある。Luhman (1973), Hoy and Tschannen-Moran (1999) 等によれば、信頼には協力関係を促進し、秩序を維持する機能があるとされる。また、Coleman (1988), Putnam (2000), 稲葉 (2007) 等の多くの研究は、ソーシャル・キャピタルとしての「信頼」を論じている。

保護者ネットワークの効果については、露口(2012)は、保護者が、子どもの友達関係を介した閉鎖的なネットワーク、子どもの教育のことで相談し合うような有益な保護者ネットワーク、地域の様々な人々で構成される地域ネットワークに参加していることが学校信頼に影響を及ぼすことを、量的な研究から指摘している。

また、保護者を属性によってセグメントに分類する保護者セグメント研究においては、保護者の就労が学校参加を制約している可能性が量的調査から指摘されている。露口(2009)は、就労する母親の方が学校への期待度が高く協力度が低い「依存」セグメントに所属する傾向があることを指摘し、末富(2005)は、学校参加の自己認識低・参加意欲が低い「受動的メンバー」に、長時間勤務する母親が相対的に多いことを指摘している。

しかし、そもそもの保護者集団の実情や保護者ネットワークの性質については十分に明らかになっておらず、個々の保護者の持つ背景が、保護者ネットワークへの参加／不参加や、学校信頼に影響を与えているプロセスについての質的な研究は不足していると言える。

さらに、欧米においては、保護者と学校の関わりの在り方には社会的属性による差異がみられること、そして学校自体が特定の社会的属性を持つ保護者に対して親和的な価値観を有していることが詳細な質的研究によって明らかにされてきた。例えば、アメリカの Lareau の研究 (Lareau 1987; Lareau 2000) やイギリスの Vincent の研究

(Vincent 1996 ; Vincent, 2002) である。これらの研究は、白人で階層上位の保護者が学校参加に積極的で親和的な態度を示す一方で、低階層やエスニック・マイノリティの保護者が学校参加に消極的であり、参加に困難を抱える様子を、緻密なフィールドワークにより明らかにしている。こうした事態の背景にあるのが、白人でミドルクラスの保護者に親和的な学校の在り方であるとされる。また、Griffith & Smith (2005) は、カナダにおいて学校が母親に対して期待している補完的な教育の役割に高い優先順位を付与して遂行しようとするのは中産階級の専業主婦の母親であり、労働者階級や仕事を持っている母親はこうした役割に第一義的な価値を置いていないことを指摘している。

さらに Vincent らは、社会階層とエスニシティの多様な校区における、大人同士の交友関係 (adults' friendships) に関する質的調査を行っている (Vincent, Neal, & Iqbal 2015)。調査によれば、大半の保護者は居住地における多様性に賛成していると述べたものの、自身の学校内外での交友関係となると、子どもたちのそれと比べて、異なる背景を持つ他者との交わりが少なかった。「自分のような」友達 (friends "like me") を持つことは「自然 (natural)」で「必然 (inevitable)」であると感じる保護者たちが存在した (Vincent et al. 2015: 21-22)。階層間の境界は、それがライフスタイルと優先順位の違いを意味するために、特に越えにくいものとして認識されていた。

また、教育に関する知識と情報といったソーシャルキャピタル資源が生まれるのは、大半が、階層とエスニシティの観点から類似の位置づけにある大人同士のネットワークに限定される傾向にあった。これは、Putnam (2000) の述べる結合型 (bonding) ソーシャルキャピタルにあたる。結合型ソーシャルキャピタルは、家族や友人といった同質的な人々の間のつながりを指し、社会的に異質な人々の間のつながりである橋渡し型 (bridging) ソーシャルキャピタルと区別される。

欧米で論点とされている社会的属性とは、ジェンダー等に言及があるものの、主に階層やエスニシティであり、こうした研究の知見をそのまま日本の学校参加研究に敷衍することはできない。しかし、日本の文脈に即して考えたとき、就労状況などを含めた保護者のライフスタイルや、社会経済状態 (SES) が、保護者と学校との関わり方や学校教育への意識、また保護者同士のネットワーク形成の在り方に影響を与えることは、大いに想像が可能である。保護者の社会的な属性によって、学校や他の保護者とつながる機会の質や量に、格差や不平等が生じている可能性を考える必要があるだろう。

さらに、子どもが就学する際に保護者が体験する生活上のギャップを考える手がかりとなる「小1の壁」現象については、世間的な認知度や困難を抱える当事者の数の多さに比して、学術的な関心が広く集まっているとはいえない状況にある。「小1の壁」自体を厳密に検討の対象とし、分析を行った調査研究は十分に蓄積されていない。

天野 (2009) によれば、「小1の壁」とは、「共働き、またはシングル親が、子を保育園から小学校にあげる際に直面する保育問題」である。これには、学童保育の保育時間が保育所と比べて短いことや融通がきかないこと、また学童保育には最低基準がなく質保証が不十分であることを指す「質的な壁」と、学童保育の供給量が不足し希望しても学童保育所に入所できない子どもが生じていることを指す「量的な壁」とあるとされる。さらに、労働政策研究・研修機構 (2013) は、統計上末子が小学校低学年になる頃に母親の就業率が落ち込んでいくことを指摘している。この現象は、「(学童保育の預かり時間の短さに加え) PTA 活動や学校行事が平日昼間に行われることが多いため、この時期に働き方を変え、退職を考える人も多いと言われている」(同上) と説明されている。さらに、ベネッセ次世代研究所 (2010) は、小学校1年生の子どもを持つ母親1,500名に対して、小学校入学に際しての生活や悩みの実態や変化について調査を行っている。同報告書の冒頭では、「子どもの小学校入学は、働く母親にとって『小1の壁』と言われることもあります。子どもの小学校入学にあたり、母親自身の生活についても考察しました」(ベネッセ次世代研究所 2010: 6) と述べられており、「小1の壁」現象に言及している。

しかし、個々の保護者が体験する、子どもの小学校への入学による生活の変化の内実については十分に明らかになっておらず、探索的な質的研究を行うことが必要であると考えられる。

3. インタビュー調査の概要

2013年8月から2014年1月にかけて、小学校1年生又は2年生の子どもを持つ父親・母親25名（有業・無業）に対する半構造化インタビューを実施した。2年生の子どもを持つ保護者を調査対象に含めた理由は、小学生の保護者としての生活を1年通して経験することで、総合的な判断が可能になっていると考えたためである。インタビューは、東京都内の所得水準の異なる3区において、あるインタビューに対して次のインタビューの紹介を依頼するスノーボール・サンプリングによって選定した。その結果、比較的高階層で高所得(高SES)のフルタイム勤務者が中心となっている。インタビューのプロフィールは表5-1の通りである。

インタビューの同意を得て録音したインタビューデータをテキスト化し、質的分析ソフトMAXQDA11を用いてコーディングした。その後、KJ法を援用してカテゴリー化を行った。保育園・幼稚園の保護者ネットワークとの比較によって、小学校の保護者ネットワークの特徴を明らかにした。

	本人の職業	配偶者の職業	居住区	子どもの学年
母A	自営業	会社員	x区	小1, 年中, 1歳
母B	団体職員	大学教員	x区	小1(双子)
父C	大学教員	会社員	x区	小2, 年長, 1歳
母D	公認会計士	会社員	x区	小1
母E	医師	自営業	x区	小1, 年中
父F	会社員	会社員	x区	小2
父G	自営業	会社員	x区	小2
母H	会社員	自営業	x区	小1
父I	保育士	パート	x区	小2, 年中
父J	会社員	会社員	x区	小1, 小4
母K	会社員	会社員	x区	小1, 小4
母L	会社員	自営業	x区	小1
母M	主婦	会社員	x区	小1, 2歳
母N	学生	会社員	y区	小1
母O	会社員	会社員	y区	小4, 小1
母P	公務員	自営業	y区	小1, 0歳
母Q	主婦	会社員	y区	小1
母R	役所事務	会社員	y区	小1, 小5
母S	保健所職員	会社役員	y区	小1, 小2
母T	主婦	会社員	z区	小1, 2歳
母U	主婦	会社員	z区	小1
母V	団体職員	会社員	z区	小4, 小1
母W	団体職員	会社員	z区	小6, 小1
父X	公務員	公務員	z区	小2, 年長, 2歳
父Y	公務員	保育士	z区	小6, 小2

4. 保護者ネットワークの性質

以下の表 5-2 は、幼稚園・保育所の保護者ネットワークと小学校の保護者ネットワークを比較した際の、両者の性質の特徴をまとめたものである。両者には、【ネットワークの疎密】，【情報交換の頻度】，【会合参加層の偏り】，【集団構成】，【父親の参加度】の各要素において性質の違いが見られた。

表 5-2 保護者ネットワークの性質

保育所・幼稚園	ネットワークの性質	小学校
密	疎密	疎
高	情報交換の頻度	低
小	会合参加層の偏り	大
同質性高	集団構成	異質性高
保育所：高 幼稚園：低	父親の参加度	低

(1) ネットワークの疎密

幼稚園・保育所の保護者ネットワークは、子どもの送り迎えの際に保護者同士が頻繁に顔を合わせるなどから、密に保たれており、子どもが小学校に上がってからも、関係が持続している様子が見られた。一方で、小学校の保護者ネットワークは、保護者同士が顔を合わせる機会が大きく減少し、他の保護者が顔の見えない存在となることで、密度が疎となっていた。

<保育所・幼稚園>

母 B (団体職員) :

(保育所時代は) ママ同士のネットワークはほんとにあったし。毎日だって会うわけよ。迎えの時に。誰かしら。保育所のときはそういうママ友同士で預け合ったりしてたの。仕事で遅くなるときとか。(今もつながりがあるのは) 保育所でつながってた人ぐらいたよ。保育所が一緒だったので、ずっとつながってるから、メールも知ってるし、なんかあれば聞かって感じだから。

母 D (公認会計士) :

ずっと今も付き合いあるのは保育所時代のママ友ですね。

母 E (医師) :

(筆者: ママ友さんは小学校に入ってからできたんですか?) いえ、保育所時代です。××保育所から××小学校に行った児童がとて多いんですね。でやっぱりそのときからの友人がママ友というか。別に子ども同士はしょっちゅう一緒に遊ぶとかじゃなくても、話がしやすいので。

<小学校>

母 D (公認会計士) :

小学校入ってからママ友っていないですね。

母 L (会社員) :

小学校はまあ(他の保護者に) 会う機会があんまりないですけどね。全然わかんないっていう感じです。

母 P（公務員）：

（他の保護者とは）学校公開でこんにちはってうだけ、結局他のイベント出てないので、もう全然わかんないの
で、知り合いになりようがないってうか。そういう感じで。

母 E（医師）

小学校だと他の保護者の方にあんまり会う機会がないので、新しくお友達になりたいなって思っても機会自体がない
んですよ。あとやっぱり保育園と違って送り迎えというものがなくなるので、ちょっと顔を合わせるということ自体がす
ごく減りますから、やっぱりなかなか機会がないなという気はします。

母 O（会社員）：

今思ってるのは、他の保護者が見えないってうことが、どんなに一人一人のお母さんたちを孤独にしてるのかな
って。もしもっとうやってお母さんが見えたら大きいのかなあって思いますね。

こうした密なネットワークから疎なネットワークへの移行は、Putnam(2000)の分類によれば、厚い(thick)ソーシャルキャピタルから薄い(thin)ソーシャルキャピタルへの移行であると言えるだろう。また、他の保護者が「見えない」ことによる孤独に言及する言及も見られた。

(2) 情報交換の頻度

幼稚園・保育所の保護者ネットワークでは、持ち物の準備などについて気軽に聞き合うような情報交換が頻繁に行われているのに対し、小学校の保護者ネットワークにおいては、困ったときに尋ねられるような情報網がないと感じているインタビューイが多かった。

<幼稚園・保育園>

母 B（団体職員）：

「あれやった？」とか言われて、「あ、まだやってない」とか。「こうすればいいよ」とか。お互いに。そういう情報交換がすごく出来たので。「一緒にお手玉に名前書こうよ」とかさ。

<小学校>

母 P（公務員）：

要は困った時にはほかのお母さんに聞くほど連絡網もそんなに持ち合わせてないので。この子のお母さんってわかってる人は数名いるんですけど、それも学校でお話する程度で、他になんか情報交換したりとかはもう全然ない。

母 B（団体職員）：

（情報の交換について）そういうフォーマルな学校って言うところの考え方と、インフォーマルなところの考え方と、やっぱり両方ね。ほしいよね。情報って大事だよー。

このように、子どもの小学校入学後は、保護者が重要であるとする、他の保護者からのインフォーマルな情報や実利的な情報を得ることが困難になっていた。

(3) 会合参加層の偏り

幼稚園・保育所と、小学校とでは、保護者会や学校行事などの保護者が参加する会合に参加できる保護者の層の偏りの大きさに違いがあった。幼稚園・保育所では、多くの保護者が参加しやすい週末や夕方を含めて多くの保護者が参加しやすい日時にこうした会合が設定されており、参加者の層に偏りが小さかった。これに対し、

小学校では、平日の日中に会合が集中し、就労している保護者の参加が困難となっており、会合に出席することへの優先順位の置き方は保護者によってばらつきがあった。

<保育園・幼稚園>

母 P（公務員）：

保育園で保護者会って、15時からとか16時からとかなので、なんとなく遅い時間のイメージ持ってて。

母 B（団体職員）：

保育園は夕方やってくれたんで、16時からとか、そうするともう、そこから帰れるじゃないですか。保護者会って、だいたい16時か16時半か土曜日の午前中とか、そういう日時でやってくれてたんですね。学校になるとなんかもう、当たり前のように、14時とかやる。14時って、みたいな。

<小学校>

母 D（公認会計士）：

保護者会があるってというのはわりと前々から言ってくればいいのかって思いました。入学式がこの日にあるってというのは、2月くらいに教えてもらってたんですけど、もう併せてその週に保護者会があるから空けといてくれて教えてくれればいいのかになあってちょっと思いました。保護者会のことは、入学式のときに急に言われて、みんなザワザワってなって。まあ働いてる人だけなんですけど、ザワザワってなったの。「えー！」みたいな。「今週じゃんこれ、どうすんの？」みたいな。「ちょっと2週連続無理なんだけど」、みたいな感じで。保護者会絶対出ないといけないというわけでもないの。まあ休めばいいんですけども。実際休んでる人も結構いますね。三分の一くらいは来てなかったりする。

母 E（医師）：

やっぱり学校行事、保護者会とか、連絡は早く欲しいなって。

母 N（大学院生）：

私は一応行くように、優先事項に入れてるから行くようにしてる。

母 L（会社員）：

（保護者会を）まあいいやもう休んじゃお、ってなっちゃうんですね。どうせプリントで配られるからそれ読めば何とかなるかなって思って。

会合に参加し、他の保護者と直接顔を合わせることは、保護者ネットワークを形成する上で重要な機会である。しかし、こうした機会へのアクセスが可能な保護者と、アクセスが不可能であったり、参加することに高い優先順位を置くことのできない保護者が存在していることが看取できる。

(4) 集団構成

幼稚園・保育所と小学校とで、保護者集団の構成の同質性/異質性にも違いが見られた。前者では、保護者同士の就労状況を含めたライフスタイルやコミュニケーションの取り方が類似しており同質性が高いのに対し、それらが多様である小学校の保護者集団は異質性が高かった。

<幼稚園・保育園>・<小学校>

父 C（大学教員）：

多分小学校との一番の違いは、保育園のお父さんお母さんって皆仕事を持って保護者の集団なんだけど、小学校に入ったときにそうではないお父さんお母さんと一緒になるっていうのが一番たぶん違うと思うんです。

母 R（役所事務）：

（保育所のころは）みんな、境遇が一緒だったから、話がしやすい。持ってる悩みも同じことが多いし、協力し合えることも多いし、心配に思ってることとかも同じようなことが多かったから、わりとすぐに、本音で話せる関係になったの。そこが小学校に入ってからは戸惑いましたね。幼稚園から上がってくるお母さんのコミュニケーションの仕方と、保育園のお母さんのコミュニケーションの仕方ってちょっと違うなあっていうのもあって。ちょっと戸惑いました。最初は様子を見て。戸惑いはありますね。時間感覚も違うし、うーん、子どもにだいたい無理させて来たなっていうのを感じた一瞬でもあった。幼稚園のお母さんたちは子どもの時間の流れ中心でずっと生活してこられたわけじゃない？幼稚園の時間が終わったら幼稚園に迎えに行き、習い事に行き、って。学校も結局同じじゃないですか。学校の授業が終わって、子どもが帰って来る時間だからそろそろおうちに帰らなきゃとか、子どもの時間割の中心に合わせて自分の時間を動かしてるっていう生活スタイルの方と、全部が大人の生活の時間に子どもを合わせさせてきてるっていうんで、そういうところがやっぱり、うーん、戸惑いがありましたね、話しても。

ここで重要なことは、保護者集団の異質性が、単なる客観的な背景の違いとしてだけ認識されているのではなく、主観的な感覚や価値観の違いとしても受け止められていることである。こうして認識された境界が、容易に越えがたいものと感じられた場合に、同質的な交友関係を求める意識へとつながると考えられる。

(5) 父親の参加度

幼稚園・保育所と小学校では、保護者ネットワークへの父親の参加度が異なっていた。保育所では、保護者会や学校行事への父親の参加度が高く、多くの父親が保護者ネットワークに参加していた。専業主婦の母親が多い幼稚園では、父親のネットワーク参加度は低かった。小学校の保護者ネットワークは母親が中心であり、多くの父親が疎外感を感じていた。

<保育園・幼稚園／小学校>

母 R（役所事務）：

保育園時代の友達とかは、旦那さんも奥さんもみんな一緒に話してたりする。「ああどうもどうも、どーお？」とか。子どもたちの話も旦那さんにもできるけど、小学校の友達には旦那さんを知らないですよ。出て来られないですよ。やっぱりお母さんのネットワークが強いから、旦那さんが入ってこれないのかな。小学校の保護者会行ってもお父さんは殆どいないし。（小学校に夫が行くと）一人にいるもんね。やっぱり。だから私がわりと旦那と一緒にいるようにしてる。だから、あんまりお母さんネットワークには入ってないです。

父 I（保育士）：

保育園のお父さんはそこそこ（小学校に）出てくる。でも最初はちょっとびっくりしたみたい。保育園とのあまりの男女比の違いに。お母さんばかりみたい。超少数派みたい。保育園のときも2割くらいしかいなかったけど、もう1割もいないですね。そこでやっぱり幼稚園のお父さんたちにはともすれば小学校にはほぼ関わりないですっていう人たちがいるわけで、そういう人たちを取り込みたいっていうのが、（校長が父親の参加を呼びかけている）そもそもそのねらいなんでしょうね。でも保育園出身のお父さんたちも少し出てきて、そこで若干両者の交流があったら、たぶん飲み会まで行けばおたがいに仕事してる父親同士なんで、そこでは子どもの話なんてほぼほしないから、おそらくあんまり垣根のない状態で話ができるとおもう。そうするとある意味フラットな、垣根のない集団がそこにできて、それはおそらく学校の垣根をなくしていくっていうところでは、プラスに働くんじゃないかなあ。感覚的には。

父 F (会社員) :

(小学校の保護者会で) 疎外感を感じますよ。場合によっては。たまに保護者会行くと、僕一人ぼつんってときありますから。先生も女性だと、「ここは生息しちゃいけないんだ」みたいな。「世の中の男、出てこんかい!」みたいな。ただ一つだけ言えることは、保育園でこんだけパパの姿が最近見えるようになってきて、ようやくその男性が育児に関われるっていう状況っていうのを確認できたにもかかわらず、小学校に入った途端急に男性の姿がパタッと消えるんですよ。

父 I (保育士) :

小学校のクラス懇親会ってというのが開催されるんですよ。これは隣の小学校の話なんですけど、僕の友達のお父さん行ったら、父親が一人だけだったんですよ。なんか変な顔されて、幹事のお母さんに。「ごめんなさい実はお母さんの会だったんです」、って言われて。「あ、そうだったんですか、懇親会って聞いたんです」って。幼稚園のお母さんにとっては、懇親会っていうと暗黙の了解でお母さんの会なんです。1年生の役員って基本的に幼稚園組の人たちがやるから。彼女らが催した会は、父親が参加することなんて想定してなかった。帰ったそうです、居場所がなくて。「ごめんなさい」って言われちゃったから、「あ、ごめんなさい」って言って帰ったって。うちは一応ね、行った。それを聞いて、俺も行こうって。あ、それを聞いて事前に確認した。「父親でも大丈夫ですよ?」って。「大丈夫、大丈夫」って言われて。一人だった。あはははは。「やっぱり一人だったー!」って。まあ、別に和気藹藹と。お話してました。

多くの保護者が、学校参加の場やそれを通じて形成される保護者ネットワークが、母親の参加を自明視する性別役割分業意識を前提としていることを感じている。

(6) 保護者ネットワークの展開

さらに、保護者間のネットワーク・人脈が、保育所・幼稚園の父母会や小学校の PTA の係や役員決めに影響している様子が看取された。また、父母会・PTA 活動を通じて、保護者ネットワークが拡大や深化をしている様子も見られた。

<小学校>

母 O (会社員) :

4年生になって学級委員長になったから、しょうがないって言ったらあれですけど、保護者会に出始めてるんですけど、不思議なこと発見したんですけど、保護者会とかそういうのは、たとえプリント読み上げ会であっても、出ることの方が、変な話、もし今自分が選出委員(次年度の PTA 役員を選ぶ委員) やったらもっと楽になるだろうなっていうことの、1 要因でもあるだろうなっていうのを今発見してて。結局そういうものに出れば出るほど学校の内情とかがわかるし、クラスの保護者の顔がわかるし、それがわかるだけで全然違うんですよ。ビジネスライクにはできないんだってということがよくわかりました。

父 J (会社員) :

僕にしても結構保護者団体の代表とかずっとやってたモチベーションのひとつには、就職とかしちゃうと、会社とか仕事関係以外の知り合いって増えないんですよ。だからそうじゃないのは、基本的に学生の頃から知ってる友達でつながってる人だけみたいな感じにどんどんなってくるんで。そういう仕事に関係ない同世代の友人知人が増えるっていうのは、こういう保護者団体系の仕事の面白いところではあって。

保護者の集まる会合に出席したり、ある保護者ネットワークに加わることは、別のネットワークに加わる契機となりやすいと考えられる。また、保護者ネットワークに加わることによって、単なる子どもを介した関係ではなく、大人同士の友人関係が成立し、保護者に充実感を与えている例も見られている。

5. 考察と今後の展望

本章では、質的研究を通して、小学校の保護者ネットワークの持つ性質の一端を明らかにしてきた。保育所や幼稚園の保護者ネットワークと比較した際の特徴や、就労状況などのライフスタイルの影響を調査することで、これまで十分に明らかにされていなかった小学校の保護者ネットワークの内実について検討することができた。しかしながら、今回の研究で得られた知見はあくまで問題発見的な規模に留まるものであり、限られたサンプルから得られた結論を容易に一般化することはできないため、今後さらに研究を精緻化して展開する必要がある。

スノーボール・サンプリングを採用し、紹介によってインタビュー協力者を得た結果、高 SES のインタビューが中心となった。調査の内容を踏まえると、紹介をした／された保護者同士は、教育や子育てに関して情報や意見を交換し合えるような親しい関係にあると考えられる。このようなつながりは同質性の高い結合的ソーシャルキャピタルであり、Vincent らがイギリスで階層とエスニシティの観点から明らかにした保護者ネットワークの閉鎖性が、日本でも SES の観点から生じているのではないかと考えられる。

さらに、保護者の就労状況の同質性が高い幼稚園・保育所から、就労状況の異質性が高い小学校へと移行しても、子どもが小学校 1, 2 年生の段階では、類似した就労状況にある保護者同士が強いつながりを持っていた。また、保護者ネットワークに対しては母親の参加が自明視され、父親が疎外されている状況が看取された。単純な世帯の所得の水準だけではなく、保護者（特に母親）の就業の有無や雇用の種類、労働時間といった就労状況が保護者ネットワークの形成に影響を与えていると言える。その背景として、一つには、従来の日本の学校参加システムが前提としている家族のライフスタイルとは異なる生活をしている保護者にとっては、学校と関わり、学校を通じて他の保護者と出会う機会自体がそもそも乏しく、就学前と異なる交友関係を築くことが物理的に難しいことが挙げられる。そして、もう一つには、それまで就学前の保育制度の二元性の下で直面することのなかった教育・子育てに対する関わり方や性別役割分業意識の個人間・集団間差異が、小学校という異質性の高い環境へと移行した際に可視化され、多くの場合で強化されていることが挙げられるのではないだろうか。

また、本研究では、高 SES の保護者ネットワークが、幼稚園・保育園から小学校への移行を経ても、再集合している様子が見られたが、低 SES の保護者ネットワークについても同様のことが生じるのかは今後明らかにする必要がある。経済的・時間的な余裕がないために、または、心理的なハードルのために、他の保護者とつながる機会から疎外されている保護者は少なくないと考えられ、そうした困難について看過することはできないだろう。

こうした状況を踏まえ、研究と実践の両方において、特定の保護者のあり方を前提としたり規範化したりせず、多様な保護者がそれぞれの方法によって参加できるような学校参加の仕組みを検討する必要があるだろう。また、学校参加が、背景の異なる他者との出会いを通じて、相互に理解を深める場として機能するような、質的な工夫も必要になるだろう。

〔参考文献〕

- 天野馨南子 (2009). 「ニッセイ基礎研究所 研究員の眼 小1の壁～その先のワーク・ライフ・バランス～」
http://www.nli-research.co.jp/report/researchers_eye/2009/eye090708.html (最終アクセス日: 2018年3月29日)
- 稲葉陽二 (2007). 『ソーシャル・キャピタル―「信頼の絆」で解く現代経済・社会の諸課題―』生産性出版.
- Griffith, A. & Smith, D. (2005). *Mothering for Schooling*. New York : Routledge Falmer.
- Coleman, J. S. (1988). Social capital in the creation of human capital. *American Journal of Sociology*, 94, 95-120.
- 末富芳 (2005). 「クラブ財化する公立学校とメンバーシップ問題―分権的教育改革における受動的メンバーの位置付け―」
『日本教育行政学会年報』31, 133-150.
- 露口健司 (2009). 「公立小学校における保護者セグメントの決定要因―学校との相互作用, 家庭効力感, コミュニティ効力感の視点から―」
『日本教育行政学会年報』35, 165-181.
- 露口健司 (2012). 「保護者ネットワークと学校信頼」
『愛媛大学教育学部紀要』159, 59-70.

- Putnam, R. D. (2000). *Bowling alone : The collapse and revival of American community*. (柴内康文訳 (2006). 『孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生ー』 柏書房)
- Vincent, C. (1996). *Parents and Teachers : Power and Participation*. London: Routledge.
- Vincent, C. & Martin, J. (2002). Class, Culture and Agency : Researching parental voice. *Discourse: Studies in the Cultural Politics of Education*, 23(1), 108-127.
- Vincent, C., Neal, S., Iqbal, I. (2015). *Children's and Adults' Friendships Across Social Class and Ethnic Difference*. Project report. London: UCL Institute of Education.
- ベネッセ次世代育成研究所 (2010). 「子育てトレンド調査レポート第 2 回 小 1 ママと子の放課後生活レポート 小学校 1 年生の子どもを持つ母親 1,500 人への調査より」
https://berd.benesse.jp/up_images/research/research11_12.pdf (最終アクセス日 : 2018 年 3 月 29 日)
- Hoy, W. K., & Tschannen-Moran, M. (1999). Five faces of trust: An empirical confirmation in urban elementary schools. *Journal of School Leadership*, 9, 184-208.
- Lareau, A. (1987). Social Class Differences in Family-School Relationships: The Importance of Cultural Capital. *Sociology of Education*, 60(2), 73-85.
- Lareau, A. (2000). *Home Advantage: social class and parental intervention in elementary education* (2nd ed.). Lanham, MD: Rowman & Littlefield Publishers.
- Luhman, N. (1973). *Vertrauen, ein Mechanisms der Reduktion sozialer Komplexitat*, 2. (大場健・正村俊之訳(1990). 『信頼ー社会的な複雑性の縮減メカニズムー』 勁草書房)
- 労働政策研究・研修機構 (2013). 「労働政策研究報告書 No.159 2013 子育てと仕事の狭間にいる女性たちーJILPT 子育て世帯全国調査 2011 の再分析」 <http://www.jil.go.jp/institute/reports/2013/documents/0159.pdf> (最終アクセス日 : 2018 年 3 月 29 日)